



『糸賀一雄の研究』（関西学院大学出版会，2015）を踏まえて（資料）

蜂谷 俊隆

(Citation)

日本特殊教育学会第56回大会(2018大阪大会) 自主シンポジウム1-18 糸賀一雄の「最後の講義：愛と共感の教育」を読み解く

(Issue Date)

2018-09-22

(Resource Type)

conference object

(Version)

Version of Record

(URL)

<https://hdl.handle.net/20.500.14094/90006483>



(日本特殊教育学会第 56 回大会「自主シンポジウム」)

糸賀一雄の「最後の講義：愛と共感の教育」を読み解く

『糸賀一雄の研究』(関西学院大学出版会, 2015)をふまえて

蜂谷俊隆 (美作大学: hachiya-to@mimasaka.ac.jp)

□糸賀さんの著作、史料の扱いをめぐって

1) 思想研究における史料の背景(性質)について→対象や背景を考慮してきたか

学園の刊行物

学園の関係者向け:『南郷』、『あざみ便り』、『びわこ学園だより』・・・

外部向け:「設立の主旨」、『近江学園年報』・・・

外部の刊行物

全国組織の機関誌:『手をつなぐ親たち』、『愛護』、『両親の集い』、『精神薄弱児研究』、『教育と医学』・・・

地方の専門誌:『(京都)教育』、『滋賀社会福祉』・・・

地方紙:『滋賀新聞』、『滋賀日々新聞』・・・

同人誌等:『新風土』、『かやの』、『サーナ』、『どんぐり』・・・

教会関係:『城北の燈』、『開拓者』・・・

著書

『精神薄弱児の職業教育』、『精薄児の実態と課題』、『この子らを世の光に』、『福祉の思想』
／『勉強のない国』、『施設養護』・・・

講演録

施設職員研修会:『ミットレーベン』、『愛と共感の教育』・・・

全国組織の大会等:「この子らを世の光に」(精神薄弱児育成会)・・・

大学講義:京都府立大学、愛媛大学・・・

未発表原稿:講演草稿、メモ・・・

2) 実践の意味について →糸賀さんの実践に即して史料を読めているか

近江学園長(施設長)＝施設運営、地域や制度への働きかけ

* 思想形成は実践ではない?

3) 言葉と概念について(1965年以降) →こめられた意味内容の相違

一般社会において使われている言葉の使用(例:発達、生産)

共通の基盤ができたような言説 →感性、感覚にうったえかける。

→現実における乖離＝その距離を埋められるかどうか。

□『愛と共感の教育』について

新任職員の研修

滋賀県児童福祉施設等新任職員研修会の講義録(原題:「施設における人間関係」)

国家再建の責務→社会的自覚と平和に対する責任者の自覚→社会的存在としての人間の尊厳

サリドマイド事件(1960年前後)、「拝啓池田内閣総理大臣殿」(1963年)

重症心身障害児施設、国立コロニー建設への関与

- 1) 「分類収容、分類処遇という原則に立脚している」「施設を隔離機関と考えるような、大きな弊害、誤った考え方におちいりやすい」「対象の子どもに、いろいろなレッテルを貼ったら事がすむと考えている」
- 2) 「かたくなな気持ちというものから解放されなければならない。(略) そのための自分自身との対決が、私たち専門職への大きな魅力になってこなければ、ウソなんです。自分自身との対決のない職員なんていうのは、これはカスみたいなもんです。」
- 3) 「自分自身との対決を深めてゆくことが、いかに大きな飛躍であるか、また仕事であるか、また生き甲斐でもあるか。」
- 4) 「収容保護的な機能からしだいに脱皮して、新しく療育という近代的な、または現代的な課題と取組むようになってきた」
- 5) (療育の)「実践的な解明という観点から人間関係を考えてみますと、第一に、人は人と生まれて人間となる、(略) その場合の人というのは、個体の人です。個体の人人が人と生まれて人間となっていく」(*悉皆皆仏性)「人間になると言うことは社会的な存在であることを証明してゆくこと」
- 6) 「本当に発達観からみて根っ子が一つだという共感の世界」
- 1) 「本当に共感できるかどうかは年季がかかります」「人間的な愛情」「人類における愛、あるいは自分自身をもみつるめる愛、そういうものが成長してゆくわけなんです。」

